

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20812

研究課題名（和文）ICTでのSociety5.0対応チーム学校の実効化：担任と養護教諭の「溝」解決

研究課題名（英文）Effective "Team School" Using ICT to Adapt to Society 5.0: Aiming to Eliminate the "Gap" between Homeroom Teachers and School Nurse Teachers

研究代表者

野村 純 (Nomura, Jun)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：30252886

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：養護教諭養成と一般の教科の教員養成はそれぞれ別のシステムで行われており、これが原因となって学校内での情報共有などにおいて溝が生じている可能性が考えられる。本研究では両者の溝について調査するとともに、これを補完するICTの活用方法について研究を進めた。教員養成段階において教科の養成学生と養護教諭の養成学生が事故発生時に連携する必要性を認識し、さらにどのように連携する必要があるかについてその情報共有の詳細を時間経過を追って学ぶ授業に関して授業研究を行った。研究の中で開発したロールプレイを中心とする授業の改善を進め教職実践演習の実質化に資する授業の開発をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

理科の授業を例に挙げると、中学校の理科の授業では年間1,000件以上の負傷・疾病が報告されており、理科の観察・実験活動の安全な実施には危機管理の観点が必要不可欠なものである。実際、毎年、何らかの事故が報道されている。万一、ケガを伴う事故が理科の授業中に起きた場合、当該生徒と理科担当教員だけでなく、養護教諭、管理職、保護者との連携が必要となる。本研究成果はこのような危険な状態を教員養成段階から解消し、児童生徒が安全に学べる学校環境の構築に資するものであり、これからの学校教育の在り方をさらに改善するものである。

研究成果の概要（英文）：Since school nurses (Yougo Teachers) and general subject teachers are fostered under separate systems, it is believed that information sharing within the school in the event of an accident does not go smoothly.

In this study, we investigated the gap between the two. We studied the development of classes to promote common understanding at the training stage and the use of ICT to complement the gap between them. A class was developed for prospective teacher students to recognize how subject matter teachers and school nurse teachers need to work together when an accident occurs. We created classes centered on role-plays, contributing to substantiating the "Practical Teaching Exercise."

研究分野：科学教育、養護教育、健康教育

キーワード：養護教諭養成 教科（担任）教員養成 事故発生に伴うコミュニケーション チーム学校 養成の溝
情報伝達 共通理解

1. 研究開始当初の背景

学校教育の基盤である「学校経営」は「学級経営」とこれを支える「保健室経営」で成り立っている。そして現代的健康・教育課題「不適応、不登校、いじめ」などが多様性を増すなかで地域社会も加えたチーム学校での対応力の重要性が増している。文科省「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援」では「養護教諭は、(中略)教職員や家庭・地域と連携」する、とされ養護教諭のチーム学校での機能が重視されている。一方、申請者はすでに21年にわたり養護教諭養成の現場におり、卒業生を約600名輩出しているが、現場に出た卒業生からの相談としては、養護教諭としてのアイデンティティの在りように関するものが多いことを感じていた。この一因として学校により、養護教諭が草刈りや給食費の集金、ポンプ修理等便利屋として使われる現状があることを知った。また、養護教諭の研究指導を千葉県養護教諭会で行った時のワークショップ「これ養護教諭の仕事じゃない」からも他の教職員の養護教諭の役割への無関心と無理解に対し不満を抱いていることが分かった。

養護教諭と教科・担任教員はその養成システムが根本的に異なり、学ぶ内容に関しては必須単位ベースで18%しか共通していない。さらにそれぞれの養成者が根本的に異なり、養成者自体が互いに理解しあっていないため、養成教育においては「チーム学校」において具体的にそれぞれの立場の教員がどのような使命を持って、どのような相互連携の役割を果たすべきなのかに触れられない状況があることを再認識した。また、この事実を多くの教科教員を養成する大学教員が認識していないため、考慮されていないことが推察された。

2. 研究の目的

上記のように、養護教諭と教科・担任教員間の連携は十分にとれているとは言えない現状にもかかわらず、これまで学校経営、学級経営、保健室経営の研究は、それぞれの領域の研究者の固有の視点をもとに、それぞれの立場を主張する形でのみ行われてきた。つまり小中学校教員養成、養護教諭養成の双方の養成・研究者が、自らの世界観に基づき収集したデータを解析し、要因を一方向的に検討し、論じてきた。このため「溝」はこれら研究により埋まるどころかますます強固なものになった感がある。

そこで本申請では、チーム学校での学校経営の視点から研究者が協働し、担任と養護教諭が、それぞれに対し持っている役割イメージを解析し、各々の経営の「いつ、どこで、どのような」溝が両者の間に生じるかを解明することを目指した。「溝」が明示化されることで議論の俎上にあげることが可能となり、「溝」の解決策も検討可能となると考えられる。さらに今後、学校内でのICT活用が進むことを踏まえ、これを活用した授業開発、アプリケーション開発を目指した。

さらに上述のように担任、養護教諭養成の仕組みは、同じ学校教員でありながら、現行のカリキュラムでは必須単位で18%の一致しかないこと、それぞれの養成教育に携わる大学教員そのものの専門性の違いによる養成段階からの構造的な課題がある。従ってこの研究成果の養成システムへのフィードバックについても視野に入れ、研究を発展した。

3. 成果報告（研究方法および結果）

（1）事故発生時に養護教諭が必要とする情報の分析

調査に協力した養護教諭の属性：

A市養護教諭13名（小学校9校,中学校4校）

調査に協力した養護教諭の経験年数は、0～5年の者が3名,6～20年の者が7名, 21年以上の者が3名である。

調査方法：

A市養護教諭13名がKJ法によりけがに対応に必要な情報を出し合い,時系列にグルーピングし,養護教諭が必要とする情報を協議した。この結果を用いて二次元展開法により緊急度と重要度を評価した。これらの結果を元にカテゴリ分類によってけが対応時に必要となる情報を整理し分析した。

2)。調査成果

この結果,養護教諭がけがに対応に必要な情報について分析を行った。分析の結果,けが対応に必要な情報は36に上り,どの場面においても情報のすべてが緊急度・重要度ともに高く,優先順位をつけることはできなかった。さらに,それらの情報がどこに関わっているのかを分類した結果,けが発生時から処置については,児童生徒に関わる情報がすべてを占めているのに対し,事後は児童生徒,保護者,学校組織とさまざまな立場や組織に関わる情報であり,養護教諭はそれらを考慮しながら多岐にわたり対応していることが明確となった。今回の研究成果を踏まえ,「養護教諭が考えたけが対応時に共有すべき情報とその根拠」をまとめた。これは,けが発生時に共有すべき情報を時系列にし,教員,養護教諭,管理職との間での情報の流れを表したものである。加えてなぜこの情報が必要なのか管理職や養護教諭,それぞれの立場からの根拠を図にした(図1)。

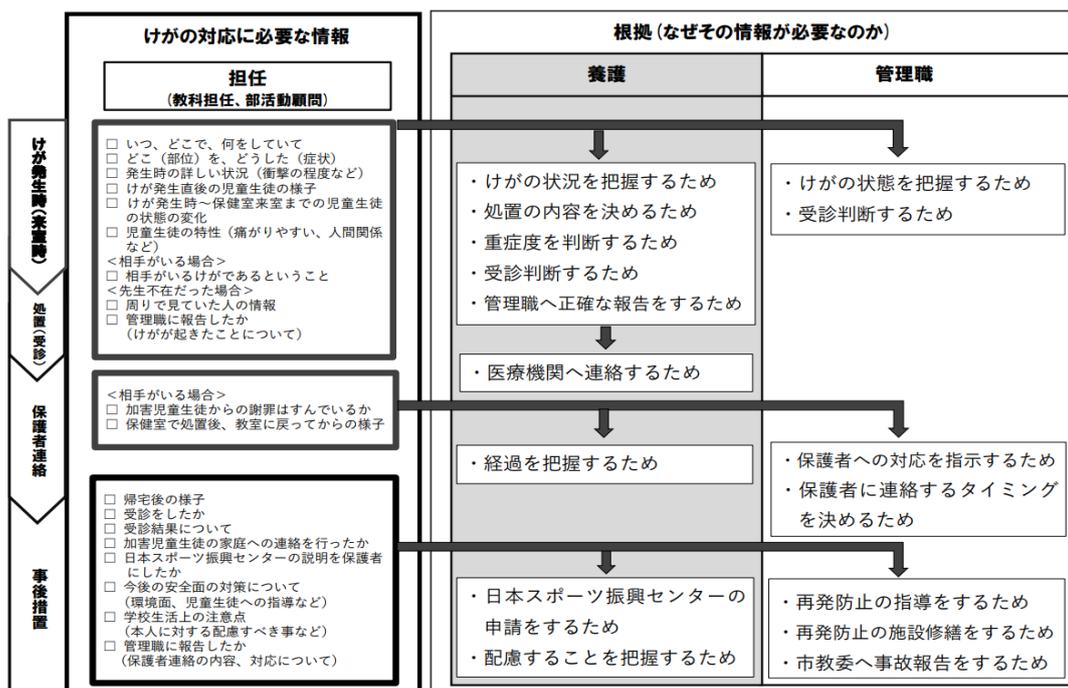


図1 養護教諭が考えたけが対応時に共有すべき情報とその根拠

(2) けが対応時における教員の情報伝達の意識調査

ここまでの研究において連携がうまくできなかった事例を収集したところ養護教諭は、けが発生時だけでなく事後の保護者への連絡や、受診を含めたその後の経過についても職員との情報共有が必要と考えているにもかかわらず、十分な情報が得られてないことが考えられた。そこで次のステップとして、けが対応時における教員の情報共有内容及び必要性の認識を調べ、さらにこれを情報共有の実践の実態と比較した。そしてこの分析を通して普段、養護教諭が感じている教員との情報共有の不全感の要因を明らかにすることにした。

1) けが対応時における情報共有の実態調査

「けが対応時における教員の情報伝達の意識」に関する調査は令和2年7月にA市内の小中学校に勤務する養護教諭を除く教員（以下、教員）150名（小学校84名、中学校66名）を対象にして、質問紙により調査した。なお、調査は口頭で研究の趣旨を説明し、無記名で実施した。質問項目は23項目であり、①いつも伝えている、②だいたい伝えている、③ときどき伝えている、④伝えていない、の4件法で、自身の経験に基づいた回答を求めた。

2) 調査結果

教員の情報共有を行っているという意識と養護教諭からみた教員の情報共有の実態との間のズレが示唆された。さらに、けが対応時「情報伝達を行う意識はあるが、実際は行動につながっていない教員」とそもそも「情報伝達の意識が低く、行動につながらなかった教員」がいる実態があることも判明した。

また、教員から養護教諭に伝えられていない情報は、けが発生時から事後へと時間が経過していくにつれ多くなり、特に【事後】に情報伝達の抜け落ちが多い傾向がみられた。

これらの結果を受けて今後、教員と養護教諭がけが対応時の情報共有をスムーズに行っていくためには教員と養護教諭の意識と行動の変容が必要だと考えた。

(3) 理科教員と養護教諭の理科実験授業における危機管理の意識の差に関する分析

そこで理科教員と養護教諭を対象として、質問紙により理科授業における安全意識や危機管理に関する実態を調査し、危機管理に対する意識の状況や個別具体的課題を明らかにすることを目的とした。

1) 調査対象・分析方法

A市内の公立中学校に勤務する理科教員と養護教諭を対象にして質問紙調査を実施した。調査への参加は任意かつ無記名回答である旨を周知し、理科教員52名、養護教諭19名から回答を得た。

2) 結果と考察

理科の授業における事故において、第一発見者となるのは理科教員である。しかし、応急処置の実施を自身の役割であると認識している理科教員は半数に満たないという結果であった。これは、緊急・救急体制における教職員の意識が「おおむね十分である」「十分である」と多くの教員が回答していた結果とは矛盾する。これについて、回答者がイメージする緊急・救急体制と自身の授業における事故との間にギャップがあるのではなかと考える。例えば、緊急・救急体制というと、救急車の要請やAEDの実施を伴う重大な事態のみを想定して回答した可能性が考えられる。理科の授業中における火傷や切り傷等の大小さまざまな事故においても、第一発見者として行うべき行動は変わらず、養護教諭との連携も欠かせない。しかし、事故が発生してしまったときの自身の役割に対する理科教員の

意識は重大事態に向けられ、中小の事故に対する対応への意識が低い可能性が示唆された。

(4) 教員養成における養護教諭と教科・担任教員の事故発生時における相互連携に関する合同学習授業の開発

教員養成を担う学部授業の学びの中に、普段の授業でも起こり得る事故やケガの対応方法を学ぶ機会をつくることが重要であると考え、理科教員と養護教諭の志望学生が免許種を越えて共に学ぶ場を創出し、これらの学生による合同のロールプレイ演習教材を開発した。

1) 教材開発にあたっての基本方針

教職未経験者向けに日常の教職員間の連携についての学びと意識を醸成することを目的とした。

2) ワークシートの作成

スムーズな実施のためにワークシートを作成した。ワークシートは、理科教員と養護教諭の動きを分けて記入できるようにした。

4) 開発した教材活用のまとめ

本教材を使った授業を通して、その連携を意識し、自身の役割を認識することは、日頃の円滑な人間関係の形成の第一歩となる。

(5) 教員養成における養護教諭と教科・担任教員の事故発生時における相互連携に関する合同学習授業の教職実践演習での試行

本実践研究では、教育実習を終えた理科教員・養護教諭志望学生を対象として、このロールプレイ演習を教職実践演習の授業で実践し、その学習効果について分析し、その効果を明らかにした。

4. まとめ

本研究では、まず養護教諭と教科・担任教員との事故発生後の連携がうまくいっていない現状を明らかにした。さらに、この現状を変える具体的な方策として教員養成における教育改革の提案を行った。授業は教員としての養成の最終段階にある実践力強化のための授業、教職実践演習を活用し、この中で免許種の枠を超え、教員となるものが連携について学ぶロールプレイ授業を開発した。そしてこれに参加した学生の学びについても分析を行った。本報告に加えデータマイニングによりさらに詳細な分析を行っている（安全教育研究 in press）。今後、開発した授業の他教科への応用について研究を進めたい。

さらに ICT 教育のためのオンデマンド教材の開発を行うとともに、ICT コミュニケーションのアプリケーションの開発にも着手し、理科部会での研修で試行している（森重ら，学校保健研究 64, 2022）。これらを使った現場でのリカレント教育プログラムの開発も継続して進めていく計画である。

5. 謝辞

本研究実施にあたり多大な貢献があった大学院生の森重比奈氏に感謝します。また、ご協力いただいた千葉県養護教諭会及び千葉県理科部会の先生方、調査および実践に参加した学校の先生方、教育学部教員、教職大学院教員及び大学院生、学部生の皆様に感謝します。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 森重 比奈、野村 純、土田 雄一、加藤 徹也	4. 巻 71
2. 論文標題 理科教員・養護教諭志望学生を対象とした合同ロールプレイ演習教材の開発と実践 (II) : 実践報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要 = Bulletin of the Faculty of Education, Chiba University	6. 最初と最後の頁 163 ~ 170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S13482084-71-P163	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 森重 比奈、野村 純、土田 雄一、加藤 徹也	4. 巻 71
2. 論文標題 理科教員・養護教諭志望学生を対象とした合同ロールプレイ演習教材の開発と実践 (I) : 開発報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要 = Bulletin of the Faculty of Education, Chiba University	6. 最初と最後の頁 155 ~ 162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S13482084-71-P155	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 土屋綾子、野村純	4. 巻 70
2. 論文標題 担任と養護教諭のオンラインによる協働授業の実践報告—GIGAスクール環境を活用した新しい保健学習の在り方の開発	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 229 ~ 239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S13482084-70-P229	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 山口悠、野村純	4. 巻 70
2. 論文標題 高校生におけるPMS/PMDDの実態及び学校生活に与える影響-保健室来室回数、保健調査有症項目数、欠席日数、遅刻・早退日数との関連—	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 99-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20776/S13482084-70-P99	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Haruka Yamaguchi, Jun Nomura	4. 巻 2
2. 論文標題 Analysis of the relationship between high school student's PMS/PMDD prevalence and frequency of their visit to the school health care room	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Annual Report of Asia & ASEAN Center for Educational Research	6. 最初と最後の頁 58-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sakumi Enomoto, Jun Nomura	4. 巻 2
2. 論文標題 Analysis of the differences in awareness of hydrocolloid dressings between general teacher and healthcare teacher	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Annual Report of Asia & ASEAN Center for Educational Research	6. 最初と最後の頁 64-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 森重比奈, 野村純, 加藤徹也
2. 発表標題 理科教員と養護教諭の理科実験授業における危機管理の意識の差に関する研究
3. 学会等名 科学教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森重比奈, 野村純, 土田雄一, 加藤徹也
2. 発表標題 理科教員と養護教諭の事故発生時の連携力を強化する ロールプレイ演習授業の開発
3. 学会等名 理科教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森重比奈、土屋綾子、野村純、土田雄一、伊藤裕志
2. 発表標題 養護教諭と担任のICTを活用した連携による理科実践授業の安全強化の新たな取り組み
3. 学会等名 日本学校保健学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 土屋綾子、野村純
2. 発表標題 ICTを活用した担任と養護教諭による協働授業の開発
3. 学会等名 日本学校保健学会第67回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Haruka Yamaguchi, Jun Nomura
2. 発表標題 Analysis of the relationship between high school student's PMS/PMDD prevalence and frequency of their visit to the school health care room
3. 学会等名 International research meeting, Spring Institute of Asia & ASEAN Center for Educational Research (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sakumi Enomoto, Jun Nomura
2. 発表標題 Analysis of the differences in awareness of hydrocolloid dressings between general teacher and healthcare teacher
3. 学会等名 International research meeting, Spring Institute of Asia & ASEAN Center for Educational Research (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ayako Tsuchiya, T Jun Nomura
2. 発表標題 Development of online classes for Health education with collaborative style by Homeroom teacher and Health education teacher ~For the improvement of elementary school education~
3. 学会等名 International Research session, Asia & ASEAN Center for Educational Research (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	土田 雄一 (Tutsuda Yuich) (10400805)	千葉大学・教育学部・教授 (12501)	
研究分担者	高木 啓 (Takaki Akira) (90379868)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------